

国の選択無形民俗文化財

# 大須戸能高組



とき 令和8年4月5日(日)

午後1時

ところ 八坂神社能舞台

新潟県村上市大須戸  
大須戸能保存会

## 【交通のご案内】

■バス(令和6年10月1日から)

☆バス路線は日曜、祝日には運休の為  
利用できません。

■車

☆日本海東北自動車道(日東道)

朝日まほろばIC~国道7号線~  
大須戸(約12分) 8Km



—お問い合わせ—

新潟県村上市田端町4番25号 村上市教育委員会  
生涯学習課 文化行政推進室  
電話 0254-53-7511

大須戸能の由来

嘉永五年(一八五二)二月の記録に「古来の能装束が切損し役に立たなくなったので奉納を願う」とあることから推して大須戸能の起源はこれよりなお久しく遡るものと推定される。

伝によれば弘化元年(一八四四)の冬、庄内の黒川能役者蛸井甚助が当地に逗留した際、庄屋、神主など村人十九人の能社中が、数年にわたり熱心な指導をうけ、嘉永四年三月鎮守八坂神社の社殿ではじめて演能したが、当時既に式三番のほか、能十五番を習得していたという。

神社の境内には、蛸井甚助が帰郷する際、記念に残したといわれる「黒川や上に流れて花の郷」なる句碑がある。

その後明治、大正、昭和にかけて更に庄内黒川より師を招き、新たに十番を習得した。

能が神事として演じられたのは、昭和七年八坂神社が村社に昇格してからで、以前は一月十一日の山神祭の日と、四月三日の節句に演じられていたが令和八年より四月の第一日曜日に変更した。

八坂神社の境内には、古くから、能舞台が設けてあったが、雪害で壊れて以来しばらく再建を見なかった。その後、大正二年三月大正天皇即位を記念して建設した能舞台も老朽化し、昭和六十三年新舞台が建設された。

中山家との関係

集落の旧家中山与惣右衛門は、創立当時より代々能の斯道奨励の衝にあたり、能装束をはじめ幕、組立式能舞台、能面等の寄進、後継者の養成など伝統芸能の維持につとめ今日に及んでいる。

〔構想〕唐土がね金山の麓に住んでいる高風は、親孝行の徳によつて次第に富貴となったが、何処からともなく多勢の童子が、高風が商っている酒を飲みに来るので、ある日その素性を訊ねようと思つて待っている。頃て一人の童子が来て昏そうに酒を飲むので、その名を訊ねると、実は瀋陽江に年久しく住んでいる狸々というものだが、御身が親孝行なので、泉の壺を与えようと思つているのであると云つてから、市人に紛れて立ち去つた。

—中入—その夜、瀋陽江の辺に数多の狸々が現れ、秋の月光の下に、汲めども尽きぬ大瓶の酒を飲んだり、酔つて舞つたりしていたが、頃てその泉の壺を高風に返し与え、御代万歳を謡いながら帰り去るのである。

大瓶狸々	(曲柄)	切能	季節	九月	所	支那江西省楊子江)
前ワキ	(高風)	中山淳一	笛	福山未菜美	地謡	加藤隆
前シテ	(童子)	大滝正貴	小鼓	中山英樹		中山平二
後ツレ	(狸々)	中山栄	大鼓	中山晴剛		高橋賢
後シテ	(狸々)	中山博之	太鼓	中山国雄		中山将
後見	中山金重後	見	中山晴夫	福山収一		

